

黎明紙333号御研鑽

今日は『常識』（信五）と『信仰の醍醐味』（信一五）の御教えを拝読させていただきたいと思います。これは明主様が比較的、私共の身近なことをお説き下さった御教えの一つでございます。非常に身近なことでございますけれども、しかし非常に深いことを明主様は説いて下さっているわけでございます。この『常識』と『信仰の醍醐味』という二つの御教えは明主様が『信仰雑話』という御神書の中にお説き下さった御教えでございます。『信仰雑話』という御神書は私共にとりまして日々の在り方、人間としての在り方の一番基本的なことをお説き下さった御神書でございまして、明主様は当時、信仰の小学校程度の教科書なんだということを仰られたことがございます。

しかし、内容は大変深い、高いことをお説き下さっているわけでございまして、この中にお説き下さったことを本当に少しづつ、私が身に付けさせていただけば、それだけで大変立派な人間にならせていただけることをお説き頂いているわけでございます。私共人間としての在り方、また真の信仰の在り方をここで明主様はお説き下さっているわけだと思います。

よく世間では如何にも、何か宗教的というか、色々な神憑り式とか、おかしいものが色々ありますけれども、そういうのは本当の意味の信仰ではないわけでございます。それで満足しておられる方はそれで良いかもしませんけれども、それが本当の意味の信仰ではないわけでございます。また、自分達だけが救われたら良いとか、

自分達だけというような在り方ではいけないわけでございます。神様は世界の全ての人々を救おうとして下さっているわけでありますし、全ての人々の幸せを神様は望んでおられるわけでありますから、その神様を心としていなければいけないわけでございます。ただ自分がけの幸せを願うようでは本当の信仰ではないということを仰つておられるわけであります。

それから一步一步完全に近付いていく努力が大切だということでございます。これは他の御教えでも明主様は仰つておられるわけでありますけれども、大変私共にとって大切なことであります。しかも、その信仰が本当に身に付いた時には、何を信仰しているか判らない位になるのが本当だということでございます。

ただ、ここで注意しなくてはいけないのは、信仰がなければ、これは初めから何を信仰しているか判らないわけであります。そうではなくて本当に魂の奥底には誠の気持ち、多くの人々の幸せのために役立たせていただきたいという、そういう本当に燃えるが如き信仰を内に秘めて、しかも、表面的には何を信仰しているか判らないというようでなければいけないわけでございます。そして、非常に親切で、誰とでも接していかれるというのが本当だということを仰っておられるわけだと思います。それから、この『春風に吹かるる如く』ということも、ただ表面であつてはいけないわけでございます。内面が何もしないで、のんびりしているということでは決してないわけでございます。

明主様御自身は、実際に、内には本当に世界の人々を一日も早く救つてあげようというお気持ちを常にお持ちであつたわけあります。それから悪に対する憤激ということでは、明主様は別のところで、人間はこの世の中の悪に対して、不正に対して、本当に憤りを感じるような人間でなければいけないと御教え下さっています。けれども、それを表面に直接、現してはいけないということです。その現し方が大切だということを仰っているわけあります。常にそういう気持ちを心に持つていなければいけないということです。その現し方が大切だということを仰っているわけあります。常にそういう気持ちを心に持つていなければいけないということだと思うのでございます。

これらは、私共にとつては一生の一つの目標でござりますけれども、ここに説いて下さったことを私共の終生の目標として進ませていただきたいと思うわけであります。

この常識ということで、世間の常識に間違っていることがたくさんあるということを忘れてしまうことがあるわけでござります。ですから、そういう間違つた常識を守るということを、明主様がここで仰つているわけではないわけであります。これはもう一つ深い意味では明主様は経と緯とが結ばれるのが理想の在り方であるということをよく仰られたわけでありますけれども、そういうことの一つの表れとして、常識ということを仰つておられるわけだと思うのでございます。

ただ表面的なことになつてしまつますと、

それこそ世間一般では、子供さんに熱が出たら、最近はちょっと変わってきたかもせんけれども、恐らく今まででしたらとにかく熱を冷すのがある意味では常識みたいなつているわけです。けれども、この常識は間違っていたわけであります。

あるいは作物を作るのに肥料をやらなかつたらできないと思って、肥料をやるのが一つの常識のようになつておりました。けれども、これも決して正しくはなかつたわけであります。そういうよう、私共が今まで常識と思つてていることで間違つていることも、たくさんあるわけであります。ですから、そういう意味の常識と混同してしまいますと、大変間違つてしまふと思うわけであります。明主様はもつともつと深い意味で、

この常識ということを仰つておられるわけだと思います。これはまた何回も繰り返して拝読させていただきたいと思います。

次の『信仰の醍醐味』も『信仰雑話』の中の御教えの一節でございます。明主様は、ここで本当の意味の信仰の在り方を仰つておられるわけであります。私共神様から常に素晴らしい恵みを日々頂いているわけでありますけれども、その御恵みに心から感謝申し上げ、またその御恵みに少しでもお報いさせていただくよう努めさせていただかなければいけないと思うのでござります。

ここで明主様が一番注意しておられるのは、いわゆる恐怖仰といふのは一番いけないということを仰つております。これは私などの責任もあるわけでありますけれども、うつかりすると、何か大変怖いゆえに信仰するとか、どうも自分は地獄へ行つたら困るから信仰す

るということではないわけでございます。そんなことをしたら罰があたるんじゃないかというような在り方は、本当の信仰ではないわけでございます。怖いから改心する、お詫びするというのは本当ではないということを、明主様はいつも仰っておられたわけであります。私共は、常に神様から頂いた御恵みに對しての感謝の気持ちを持たせていただくということであります。

そして、人事を尽くして天命を待つことがあります。ただその時に、明主様が、他のところで「果報は寝て待て」ではなくて「淨めて待て」というのが本当であるということを仰っておられるわけであります。先程の『常識』の御教えにもございましたように、

他人を幸せにすることに私共が人間としては何時も最善を尽くさせていただくと、それによつて与えられる神の賜が眞の幸福であるということを明主様はここで仰つておられるわけであります。

常に私共、自分が幸せになりたいというのではなくて、神様から頂いた御恵みに対し、少しでもお報いさせていただこうという気持ちで、この世の中の多くの方々の幸せのために努力させていただく結果、その人が別に求めなくとも、神様は素晴らしい御恵み、幸せを与えて下さるわけでございます。

その幸せが眞の幸せであるということでござります。ただ目の前にあるもの、幸せを掴むというのは、ただそれだけのことであつて、本当の幸せではないわけでございます。

これはよく言われる例えでござりますけれども、ここに一握りの米の粒種があつて、それをそのまま食べてしまえば、その時一応、お腹は膨れるかもしません。けれども、それはそれで終わつてしまふわけです。けれども、それを一度、蒔いてやれば、秋になればその何十倍、何百倍の収穫になり、その中の一部をまたさらに蒔いてやれば、これが何十年、何百年、何千年経つても、大きなそういう収穫になつてくるわけであります。

つい私共は目先の事だけにとらわれてしまうわけでありますけれども、それで与えられる幸せは、本当の幸せではないので、本当に私共は、神様の御心に叶わさせていただくようにしていかなければいけないわけでございます。神様は、少しでも多くの人々の幸せを願つて下さつて いるわけでございますから、

その神様の御心に少しでも近寄らせていただくことによつて与えて
いただく幸せこそ、本当の幸せであるということですぞ。

この『常識』と『信仰の醍醐味』は明主様が私共が日常、日頃、何時もこれを拝読していきなさいということで、そしてこの事を何時も目標にしなさいということで説いて下さった教えでござります。私共は、常に繰返し拝読させていただきたいと思うわけでござります。

(一九八〇年七月二〇日)